

お股の緩い後輩ちゃんはすぐおしっこ漏らしちゃう♪
「先輩い～……おしっこの匂い嗅がないでくださいい……」

トラック01

「ひやううつ、どんどん雨強くなってきたー！ 気予報では降らないって言つてたのにー！」 天音

「あつ、先輩、あそーー あのバス停行きましょう！ 雨宿り！」

「はーつ、はーつ…………もー、びしょ濡れ…………折り畳み傘くらい持つてくれば良かつたです……」

「先輩も結構濡れちゃいましたけど、寒くないですか？ 大丈夫ですか？」

「ふえ？ わ、私？ 私はカバンを傘代わりにして走つてましたから…………えへへ、まあそれでも結構濡れちゃいましたけど大丈夫です♪」

「つて……私の心配よりも先に自分の心配をしてくださいよね！ んもう……」

「…………それにしても…………はあ…………雨、しばらく止みそうにありませんね」

「不幸中の幸いじゃないですか、このバス停、雨漏りはしてないみたいですね」

「もうだいぶ古いし今は使われてないから中もびしょびしょかもつて思つたんですけど……椅子は乾いて座れそうですしよかったです」

天音

「……先輩、今日はすみませんでした。私の居残り練習に付き合つてさえいなければ先輩は先に帰れたのに」

天音

「ふえ？ 気にしてない、ですか？ ……いえ、やつぱりダメです。私が気にするんです。先輩は優しいから、絶対そう言うと思つてましたし……」

天音

「……っていうか、なんでずつとうつむいてるんですか？ 椅子、ちょっと汚れてますけどちゃんと座れますよ」

天音

「……雨、いつ止むかわからないですし、少し座つて休んだほうがいいと思いますけど」

天音

「え？ 私の制服……って、わつ！ シャツ透けてる！？ はうう……な、なるほど……だからさっきから目線を背けてたんですね……」

天音

「あー……べ、別に、い、いいですよ？ ほら、見えてるって言つてもブラだけですし……そ、そうです！ ブラなんて突き詰めればただの布じゃないですか！」

天音

「そんな、ただの布を見られたからって恥ずかしい訳……恥ずかしい……わけ……う、ううう……」

天音

「え、ええつと……やつぱりそのう……あのう……正直いうと、恥ずかしくは、あるんですけど……ちょっとだけですから……我慢できる範囲ですから……」

天音

「それより、私の我儘で先輩を立ち放しにするほうが申し訳ないので……ね？ ほらー。私と一緒に座りましょ？」

天音

「はい、本当に大丈夫です。後から怒つたりしませんから……あんまりジロジロ見られると恥ずかしいんですけど」

天音

「でも……先輩になら別に見られてもいいし……むしろ見られたいっていうか……」

天音

「つて、ああ！ いえいえ！ 何でもないです！ 何でもないですから……！」

天音

「は、はい、本当に……どうぞどうぞ」

天音

「先輩……別にそんな離れた所に座らなくてても……」

天音

「もつとこつち、私の近くに来ていいですよ？ ……え？ そこでいいんですか？ まあ、それならそれでいいんですけど」

天音

「……つて、あのう、先輩？ こっちを見ないようにしてくれる気遣いはすつゞく嬉しいんですけど、そこまで露骨に視線を外されると……それはそれでちょっと傷つきます……」

天音 「でも……そういう目で見てくれるんですね……ちょっと意外です……」

天音 「ふえ？ そういう目つていうのは、そのう……あれですよ……え、エッチな目、っていう意味です……」

天音 「だ、だつてえ……！ 先輩、普段は私の事女の子として見てくれないじゃないですか！ こう友達感覚つていうんですか？ いつもそんな接し方ですもん……！」

天音 「先輩と出会つてから割と経つてますけど、私だって女の子なんですよ？ もうちょっと意識して欲しいな……とか思つたりする訳で……」

天音 「あ！ だからつて今すぐ女として見ろつて言つてる訳でもなくつて！ そうじゃなくつて……！」

天音 「……つて、あ、あはは……私は何言つてるんだろ……今の話、忘れてください……あうう……」

天音

天音

天音

天音

天音

「あ…………えへへ、ほんといつまで降り続くんですかね……」のまま暗くなるまで止まなかつたら、さすがに濡れて帰るしかないですね」

天音 「ん……くしゅつ！ あ、えへへ……大丈夫です。ちょっと冷えただけなので……」

天音 「でも、もし『のままずつ』と冷えたら風邪ひくかもしれませんから……ね、先輩……もつとこ」つちに寄つて私の事温めてくれませんか？」

天音 「おしくらまんじゅうみたいに密着する必要はないんですけど……少しでもお互に身を寄せ合つた方が離れてるよりはマシだと思いますし……」「それにいい加減先輩と顔を合わせてお話ししたいですから」

天音 「はい、私は本当に大丈夫です。見られたって言つてもブラですから……そりや、おっぱいの形とか大きさはちょっとわかつちゃいますけど」

天音 「先輩になら……見られても大丈夫ですので……」

天音 「…………もう……女の子がここまで言つてるんですけど、いい加減こっち向いてください！ んん……えいつ！」

天音

「はあ……やつとこつち向いてくれましたあ……え
へへ、ね？ 別にシャツの上からブラが見えたつ
て大したことないでしよう？ 小学生の頃なんて
ジャージが透けて当たり前でしたし……」

天音

「そ、それでですね？ ビ、どうですか？ 私のお
……そのお、おっぱいは？」

天音

「ううう……だ、だつてえ！ ブラ越しとはいえ、
自分から男の人におっぱい見せつけたのなんて初
めてですもん！ って、別に見せつけてるつもり
はないんですけどね！」

天音

「でも結果的にこりやつて見せちゃつてる訳でして
……」

天音

「せ、せつかく乙女のおっぱいを見せてあげてるの
に何も感想をくれなかつたら、まるで自分に魅力
が無いつて言われてるみたいで嫌じやないです
かあ！」

天音

「だ、だからですね？ はうう……何か言つてくだ
さいよお……せんぱい……」

天音

「ふえ？ お、大きくて綺麗、ですか？ 別にクラ
スにはもつと大きい子もいますけど……」

天音

「ま、まあ……そうですね……小さいほうじゃ、な
いつていう自覚はあります……」

天音

「あうう……これ、想像以上にヤバイですよ……
面と向かってそういう事言われるの初めてで……
あうう……顔赤くなっちゃいますう……」

天音

「つて、先輩ったら凄い目力……もしかして、そ
のう、私のおっぱい……興味……あつたりしま
す？」

天音

「えつ？ ほ、本当に？ 自分で言うのもあれです
けど、私なんかよりおっぱい大きくて柔らかくて
可愛い女の子、いっぱいいますよ？ ほ、本当に
私なんかのおっぱいに興味あるんですか？」

天音

「はええ……そ、そつか……そなんですね……
興味、あるんですね……」

天音

「あ！ いえいえ！ 謝らないでください！ 聞い
たのは私なんですから……先輩は何も悪くないで
す」

天音

「そういうふうに、その、おっぱいに興味があるの
も……男の人なら当然だと思うし……むしろ私な
んかのおっぱいに興味を持つてくれて嬉しいです
し……」

天音

「…………いいですよ？ もう見られちゃつて
ますし……私なんかのおっぱいで良ければ、好き
なだけ見てください」

「…………あ…………あはは…………うん、え、ええっと…………
はううう…………先輩、気づいてます？ 目、すっぽ
い開いて、鼻の下、のびてますよ？」

「ふふ♪ あ、いえいえ♪ 別にバカにしてるとか
じゃないんです。ただ、そのう…………何だか可愛い
なって思つただけで…………♪」

「先輩つて、普段は部活と勉強を両立してるので
目な優等生つていうイメージでしたから、えへへ
♪ いつもとのギャップが面白くって♪」

「何だかいい意味で先輩ともつと近づけたなあって
感じて…………ちょっとぴり嬉しくなっちゃいました
♪」

「ええ？ 別に格好よくなくたつていいじゃないで
すか。ずっと他の人の目を気にして生活してちゃ
疲れちゃいますよ…………？」

「幸い今は私と先輩しかいませんし、雨の中こんな
寂れたバス停にわざわざ来る人もいないでしょ
うから……」

「好きだけ、その、私の事…………私のおっぱい……
見てくれていいですよ？」

「今だけ…………私の前でだけは、格好悪い先輩でいい
ですから…………本当の先輩を…………男の子な先輩を、
私に見せてください…………♪」

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

トラック02

「んあ…………あうう…………はあ…………なんか変な気分…………先輩がこっち見てるだけなのに…………顔熱くなつてきて…………ううう…………落ち着かない…………」

「そりや、ブラは見えちゃつてますけど…………その下…………乳首が見えるわけじゃないのに…………」

「…………体が熱くて…………心臓がドキドキしちゃつて…………あははっ、こんなの変ですよね。もしかしたら風邪ひいちゃつたのかも…………」

「ふえ？ 先輩も同じ…………なんですか？」

「そう、なんですね。先輩も…………ドキドキ、してるんですね…………そつか…………えへへ、ちょっと安心しました」

「じゃあ…………今…………私と先輩、2人共同じ事、考えてるのかな…………」

「だつて、先輩つたら私の事ばっかり見てるから気づいてないかもですけど…………先輩だつて、そのう…………シャツ、透けてますよ？」

「お互に異性の胸を見せあつちやつて…………えへへ、傍から見たら変態さんですね…………あははは…………」

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音
「…………はうう…………先輩つて結構…………その、たくましいんですね…………てつきりもうちょっと痩せてるのかと思つてました」

天音
天音
「シヤツがぴつちり張り付いて、筋肉が浮き出てて
……女の子とは違う、がつちりした体……」
「す」く、男らしくて……いつもの優しい先輩の印
象がちょっと変わります」

天音
「えっと……変な事聞いたやうかもですけど……男の人の胸って……やっぱり硬いんですか？」

天音
「女の子はどれだけ鍛えてもおっぱいは柔らかいままですし……男の人の胸、興味あります……」

天音
「なんでも、鍛え抜かれた筋肉は石のようにもないと
かなんとか……」

「…………あのう…………もしよかつたらそのう…………先輩の
胸…………さ、触つてみても、いいですか…………？」

「……えつ！？ い、いいんですか！？ あ、いや、すみません、大きな声出しちゃつて……」

天音
「そんな簡単に触らせてくれるとは思つて無くて……やつぱり男性と女性じゃ胸を触らせる行為の重みが違うんですかね……」

天音

「…………あのう……先輩？ もしかしてなんですか
ど、日頃から私以外の女の子にも、「うやつて氣
軽に胸を触らせてたりします…………？」

天音

「ん、まあ別に？ 先輩の胸は先輩の物なんですか
ら、私がとやかく言う筋合いはないんでしょうけ
ど……」

天音

「でも何かこう……胸の奥がモヤつてするというか
なんというか……先輩が誰彼構わず他の子に体を
触らせてたらと思うと、今この体験が特別じやな
くなるというか……感動が薄れるというか……
むううう…………！」

天音

「…………ふえ？ あ、そ、そうなんですか？ 女の子
に触らせるのは私が初めて…………そ、そつか……私
が初めて…………えへ♪ えへへへへ♪…………♪」

天音

「うて、はわわっ！ す、すみません…………変な声出
しちゃいました…………」

天音

「で、では…………改めまして…………先輩のお胸…………
失礼します…………」

天音

「わっ、硬い…………」

天音

「石みたいって言うのはちょっと大袈裟ですけど……
でも、思つてたよりもずっと硬いです」

「へえ……」これが先輩の胸……ああ……硬くて逞しい……先輩のお胸……」

「あ……先輩の……心臓の音、感じます……トクン、トクンって……本当にドキドキしてるとんですね……」

「ああ……先輩が生きてる音……先輩の心の音……す」「く落ち着く音……もつと……手で触れるだけじゃなくて、耳で感じたいです……」

「ああ……えへへ……♪ 先輩……すみません、急に抱き着いちゃって……」

「でも、どうしても」「やつて先輩の熱を、鼓動を感じたくて……もう少しこのまま……私の事、抱き留めてください……」

「その代わり、先輩も私の鼓動、感じてくれていいですから……ぎゅって抱きしめて、おっぱい越しに私の鼓動……私のドキドキ、感じてください……」

「ああ……♪ 先輩……ん、えへへ……♪ 力強くてあつたかい……はい、いいですよ？ そのまま目を開じて、私を感じてください」

「はあ……ふうう……ん……んん……はあ……先輩……ふふ♪ 鼓動が速くなつてます……♪」

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音
「私と抱き合つてるのが恥ずかしいんですか？」
え

「へへ、照れ屋さんで可愛らしい……」

「つで、私も先輩の事言えないですよね…………」
「うう……自分でも分かります……私もドキドキしそぎて
……顔、熱くなつてますもん…………」

「あうう……わ、笑わないでください……！ もう……そんな意地悪な先輩にはお仕置きです！」

天音
「んん……それ！ すりすりう！ すりすりうう！
んん、こうやつてえ……頭押し付けてくすぐつ
てあげます！」

天音
「って、わっ！ わわっ！ せ、先輩？ 急にどう
したんですか？ そんな体ビクうつてさせて…
」

「あ、何だかコリつとしたのが顔に当たつて……つて、こ、これ……って！？」

天音
「は、はわっ！ はわわっ！ せ、先輩！？ これ
……先輩の乳首、ですよね？」

天音
「はわわ……乳首ピンと立っちゃつて……もしかして先輩、今興奮してるんですか？」

天音

「だ、だつて！ 乳首勃起させちゃうなんて……そ
の、性的に興奮した時じゃなきや普通ないですよ
ね？ 女の子もそうですし……」

天音
「ふああ……そつか……先輩、私に抱きしめられて
乳首たつちやつたんだ……」

天音
「ふ……あははつ♪ なんだろう……ちょっと面白
くて……すつ♪く嬉しい……♪」

天音
「だって、先輩は今、私の事、一人の女の子として
見てくれてるって事ですもんね？ そう考えると
……はい♪ やつぱり嬉しいです♪」

天音
「…………んん……あ、あのう、先輩……？ 変な事い
うようであれですけど……私、先輩の乳首触つて
みたいですね……」

天音
「はい、シャツ越しなんかじゃなくって、直接……
直で触りたいんです……」

天音
「男の人の乳首なんて今まで触る機会なくって、そ
のう……自分のしか触ったことないので……好奇
心というか、気になるというか……」

天音
「や、やつぱり、ただの後輩に触られるのは嫌です
か？ ……私に触られるのは……嫌、ですか？」

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

「ああ♪ は、はい♪ ありがとうございます……！」
えへへ……男の人の……先輩の乳首触れる
んだ……私で興奮してくれた勃起乳首……♪」

天音

「つて、え？ 先輩も触りたい…………ですか？ へ？
え？ 先輩が先輩の乳首を？ そ、それってど
ういう……？」

天音

「あ、違う、つて…………ふえ？ も、もしかして……
私？」

天音

「私の乳首を触りたい…………つて…………ふええええ
えええ…………！？」

天音

「い、いや！ せ、先輩！ ま、待つてください！
それはダメです！ 流石にやり過ぎです！」

天音
天音
天音
天音

「あ、いや、確かに私だけが先輩の乳首を好きにで
きるというのも、不公平ではありますけど……
だ、だからってそんな……！」

「あうう…………あうあううう…………そ、そうですよね……
……私が先輩の乳首に興味があるように、先輩も私
の乳首、興味あるんですね……」

天音

「…………わ、わかりました。先に触りたいって
言つたのは私ですし……ち、ちょっとだけ……本
当にちょっとだけなら……い、いいですよ?」

天音

「こんな事……先輩にしか許さないんですから……誰にも言っちゃダメですよ？ 約束ですからね……？」

天音

「はい……そ、それじゃあ乳首触りつ」する為に、シャツ脱ぎましょつか……」

天音
天音
天音
天音
天音
天音

「あ、でも脱いでるのを見られるのは恥ずかしいので、脱ぎ終わるまでちょっとそつち向いててください……ほら、早く……！」

「じゃ、じゃあ……ぬ、脱ぎますね……」

天音
天音
天音
天音
天音
天音

「ん……しょ……つと……んん……わ……雨のせい
でシャツ、肌にくつついで……んん、ちょっと脱
ぎ辛い……ん、んん……んん……はふう……」

「あうう……こ、これえ……外でおっぱい丸出しになつてえ……ううう……痴女みたいな恰好しちやつてるよお……」

天音
天音
天音
天音
天音
天音

「はあ、はあ……せ、先輩？ そのう……お待たせしました。シャツ脱ぎ終わりましたので、」つち向いてください……」

天音
天音
天音
天音
天音
天音

「あ、先輩の胸……乳首見えて……つて……私の乳首も、先輩に見られちやつてるんですね……」

天音

「はううう……あううう、見られたあ……初めて男のにおっぱい見られたあ……恥ずかしい……うう、ううう……」

天音

「あ、ちょ、ちょっと、み、見ないでください……いや、おっぱいは別に、もう今更なのでいいんですけど……顔は、見ないでください……」

天音

「だ、だつて……きっと誰にも見せられないような真っ赤で恥ずかしい顔になっちゃつてますからあ……ううう……」

天音

「や、やあ！ ちょっと先輩！ 視き込むの禁止です！ ちょっと、や、やめてください……」

「むう……」うなつたらあ……えいつ！

天音 天音 天音
「はあ、はあ……え、えへへ……どうですか？ これなら私の顔、見えませんよね？ えへへゝ 我ながら名案でした」

「……ん、ただ……」この体勢だと、そのう……乳首 同士が擦れてムズムズしちゃいますけど……」

「ん、あ……ん……！ ちょ、ちょっとお、先輩 やあ、そんな乳首」すりつけちや……や、あんつ……」

天音
「はあ、はあ……はふう……んもう、先輩？ おとなしくしなきや……めつ！ ですよ？」

天音

「はい、いい子いい子です♪ ふふ……何だか私が
お姉ちゃんになつたみたいですね♪」

「つて、勢いに任せて凄い事になっちゃつてますけ
ど……せつかくですし、このまま乳首触りつこし
てあつたまりましょうね？ 先輩♪」

トラック03

「はあ、はあう……ん、せ、先輩……これ、凄いです……こんな隙間なく密着して……おっぱい押し付けちゃう体勢……」

「私と先輩のドキドキが重なつて……ううう……」
「れ……ダメです……恥ずかしいです……」

「でも、先輩の乳首も触つてみたいですから……」
のまま……このまま抱きしめあいながら、乳首コリコリしちゃいますね……？」

「ふう、ふうう……んつ……じゃあ、まずは乳首の
周り……乳輪をなぞるみたいに……さわさわ……
さわさわ……ど、ど、どうですか？」

「あ、乳首ピクピクして……えへへ、男の人も……
やつぱり……ん、感じるものなんですね」

「さわさわ……さわさわ……わあ……凄い……先輩
の乳輪なぞつてるだけなのに、どんどん乳首勃起
してきて……」

「……先輩……私の指で感じてくれるんですね……
嬉しい……♪ ならもつと沢山触つてあげます
♪ それ♪ さわさわ……さわさわ……」

「乳輪触りながらあ……ふうううううううううう
ふつ、ふつ、ふうううううううううううううううう

天音

「あはは、先輩？ 乳首、鳥肌立つてますよ？ え
へへ、お耳に息吹き込まれるの好きなんですね…」

天音

天音

天音

天音

「ふふふ、先輩？ 鼓動が速くなつてますよ？ はい、バレバレです♪ 裸で密着してるとから分かりますって」

天音

「つぐ、んひやあつ！？ あ、せ、先輩…………？
ちょ、ちょっと待つてくだ……ひやい！？ ん
にゅう！ やつ！ そんな急におっぱい触っちゃ
ん、やん…………」「…………

天音

「や、あ、ま、待つてください……いや、お互い触りつけするのには間違いましたね……ん、あ、ひやんっ……」

天音

「ちよつ！？ いきなり、ち、乳首い、ああつ、グ
リッてしちや……あ、あ、あ、ああんつ……だ、
ダメえ……♪ そんな激しくコリコリしちゃめ
なのお……」

天音

「はあ、はあ……も、もしかして、さつきからかっ
た事への仕返しですか……？ ううう……そん
な、あん……！ ちよつと先輩の乳首虐めただけ
じゃないですか……」

天音

「ん、はにやあつ……！ ま、待つて、ください、
ん、あんつ……乳首……んはあつ、グリグリ……
つぶしちゃ……ん、やあ……あ、あ……ああ
あつ……！」

天音

「ふあんつ、あんつ、おっぱいも、そ、そんなに強
く、揉んだら……んあ、あ、あ、あ、ああ……
！ 痕、残つちゃ……や、は、ひやあああ
ん……！」

天音

「ふああ……！ はあ、はあ、はあ、はあうう……
んん……はあ、はふう……ん、はつ……ああ、
ん、ひ、はああつ、はあつ……変な声が、あ、
んああ……！」

天音

「はあんつ、ふ、んひああつ、ん、ああつ……あ、
くああ、う、ひあつ……はあつ、はあつ、はあ
ああつ……！」

天音 「はあ、はふう……んん、先輩がその気ならあ……
はあ、はあ……私にだつて、考えがあるんですか
らね……？」

天音 「んううちゅ……ちゅ……れろ……れろれる……
ん、ちゅううううう……ふはあ……はあ、はあ……
……ど、どうですか？ 先輩……」

天音 「これ、耳舐めっていうみたいで……男の人は好き
なんですよね？ 雑誌にそう書いてありました……
…」

天音 「初めて人の耳の中を舐めましたけど……ん、ちゅ
……れろ……れろれろ……れろれろれろれろ……
ん、ちゅ……♪」

天音 「ふふ♪ 先輩？ おっぱいを揉む手が止まつてしま
すよ？ そんな余裕もないくらい感じてくれる
んですね……」

天音 「えへへ、これで形勢逆転です……♪ このまま乳
首弄りながら耳舐め……してあげますね」

天音 「んう……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ……れろれる……ん
ちゅ……ちゅふふ……ん、れろれろれろれろお……
……ちゅ、んううちゅ♪」

天音 「はむ♪ れろれろ……れろれろれろれろ……
ちゅ、ちゅふふ……んん、れろれろお……れろれ
ろれろれろお……」

天音
「ん、はあ～～♪ 先輩～ん、ちゅ～乳首
もお～～コリコリ、コリコリ～ちゅ～れ
れろ～～ん～ちゅ♪」

天音
「はあ、はあ……♪ 後輩に耳舐めされながら乳首
虐められてえ……んぐくちゅ♪ れろ、ちゅ……
れろれろお……」んなに乳首おつきくしちゃうな
んてえ……」

天音
「はあ、はあ……♪ 先輩……もつと奥まで……お耳の中……ぺろぺろしてあげます……」

「はあ～……む、じある……じある……ど、
ちゅ……れり、れろれりお……れっす、んぢゅ
……じゅじゅじゅじゅ……ん、じゅじゅじゅじゅじゅ

天音
「んん、しえんふあうい……じゅる♪ んちゅ
れろれろれろれろお……んちゅ、ちゅ、ぢゅる…
ぢゅるる……れうろれろれろお……」

天音
「じゅるる……れふふ……れろれろ……んちゅ
ちゅ……じゅる……んんふ……れろ……れろれろ
れろれろ……んぱつ……じゅるる……はむう
ん♪ れろれろ……じゅるる……れろれろれろれ
ろふ……」

天音

「んむう……はあ……はむう……れろれろおへ
じゅるへ んんへ 乳首もおへ はあ……へ ハ
リ「リい……んちゅ、れろれろお……れゅつ
きゅうへ……へ」

天音

「はあ、もひとお……もひと嘘いぢくれていいです
からね? ん……ちゅへ ちゅ、ちゅ……れる、
れろれろお……じゅるる、んん、ちゅ」

天音

「ん、ふうううううううううううううううううう
ふうううううううううううううううううううう
もひと可愛い先輩を……私に見せてください…
…へ」

天音

「れうう……れろれろれろれろお……れろれろれろ
れろお……じゅるる、んふう……しえんぱいのお
耳い……私の誕塗れで……んちゅ、じゅる、じゅ
るじゅるじゅるじゅるう……」

天音

「んう……ちゅへ じゅるるへ じゅる……ん
ふう! れろ……れろれろ……んちゅへ じゅる
……じゅるじゅる……ん、ちゅふ……ちゅふ
ふう! ジュル、ジュル……じゅりゅりゅりゅ
……」

天音

「んん……♪ はふう……ふう、ふう……んちゅ、
ちゅ、ちゅ♪ れろお……れろれろれろれろお……
…ちゅ、んちゅ♪ ちゅ……れる、じゅるる……
じゅるじゅるうううう……ん、ふはあ！ はあ、
はあ、はあ、はあ～～～」

天音

「ん、えへへ……ちょっと激しくしそぎちやいまし
た……先輩……お耳、『』馳走様でした」

天音

「で～も～……片側だけ舐めると不公平ですからあ
……」

天音

「こ……ちのお耳も、いっぱいペロペロしてあげます
……♪」

天音

「はあ～……む♪ じゅる♪ じゅりゅりゅ……ん
ちゅ……れる、れろれろ……れ～～れろれろ
れろれろお……んちゅ、ちゅ……ちゅ♪」

天音

「れろれろ……んちゅ♪ ちゅ、ちゅ……れる、れ
ろろろ……んちゅ……ちゅう～……ちゅ、ちゅ
♪」

天音

「ん、ふううう～～～♪ ふつ、ふつ、ふ
うううう～～～♪」

天音

「はあむ♪ ちゅ、んちゅ……れる、れろれろ……
んちゅ……ちゅ♪ ちゅ……ちゅ、んくちゅ♪
ちゅ、ちゅ♪」

天音

「先輩……んちゅ、ちゅ……れろ、れろれろ……
はあ……しえんぱうい……ちゅ……れろれろれ
ろれろ……」

天音

「んむう……ん、ん……ちゅ、れるれる……ちゅ
ぶ、んん……先輩い……はふつ……ちゅ、れろれ
ろれろれろお……ちゅ、ちゅ♪」

天音

「はあ、はあ……ちゅ、ちゅ♪ れろれろれろれ
ろ……ちゅぶ、んちゅ……れる、れろれろ……
ちゅ、ちゅ♪」

天音

「はあ、はあ、はあ、はあ……れろれろ……ん、
ちゅ……ん、んん……ちゅ、ちゅ♪……れろ♪
ちゅ……ちゅ、んくくちゅ♪」

天音 天音

「はあ……あつたかい……裸でおっぱい押し付けて
……乳首こすりつけての耳舐めキス……んちゅ……
……ちゅ、ちゅ♪」

天音

「雨に濡れて冷えた体がどんどん火照つてきて……
はむ……ちゅ、れろれろ……ちゅ♪……んん……
ちゅ、れりゅれりゅれりゅれりゅ……」

天音

「んふう……はむう、ちゅ♪……じゅる、じゅる
るるるるううう……じゅる、んふう、ちゅ、じゅる
る……んちゅ、ちゅ、ちゅ♪」

天音 「はあ、はあ……先輩？ 手、ずっと止まつたままですけど、いいんですか？ 私のおっぱい……もう触らなくていいんですか？」

天音 「んちゅ……ちゅ、ちゅ……はあ……あ、いえ……別に私が触つて欲しいとかじやなくって……決してそんな事ではなくって……」

天音 「……ただ、その……」んな、お外でおっぱいまで出したのに……少し揉まれただけで終わりじゃ、頑張った意味が薄いというか、何というか……」

天音 「ん……ちゅ……せつかくこんな恥ずかしい思いでおっぱい見せてあげたんですから、もつと私の事……私のおっぱいを使って楽しんでください……先輩……」

天音 「はむ……ちゅ、ちゅ……れる、れろれろお……じゅる、じゅるるるるるる……ん、れろれろお……ちゅ……ちゅ……れる、んつ！ ん、んん！？」

天音 「ふはあ！ あ、きゃんつ！ や、せ、先輩……だからって、そんな急に……あ、ひゃんつ！ また胸……おっぱい揉んじゃ……ひやあんつ！？」

天音 「はつ、はあ、はあ、はあ……♪ ん、先輩の手……あつたかくつて、おっぱいに沈み込んできて……んあ、あ、ああ……♪」

「はふう……んん、その手つき、いいです……先輩に求められるのが伝わって……おっぱい愛されてるのが伝わってえ……」

天音
「ん……ちゅ♪ れろれろ……ちゅ、んぐぐ……ちゅ♪ れろれろれろお……ちゅぷ、ん、ちゅ……れろ、れろれろれろれろお……」

天音
「はあ、はあ……♪ ん、いいですよ？ 遠慮なんてせず……私も先輩の胸……乳首弄りますから……先輩も、私のおっぱい……乳首……弄つて、可愛がつてください……」

天音
「始めは刺激が強すぎてビックリしちゃいましたけど……先輩に触られるの……気持ちいいですから……はい、いっぱい私の乳首……可愛がつて欲しいです……♪」

天音
「ん、ああん♪ やあ……ん、ちゅ……れろれろ……ちゅ、ん、はふう……んぐ♪ 乳首コリコリきましたあ……先輩の大きな指が、んん！ 私の乳首挟んできてえ……！」

天音
「はあ、はあ……ん、ちゅ……れる、ちゅ……れろ……れろれろれろれろお……んん、じゅる、じゅるじゅる……じゅるるるう……」

天音
「んはあ……せんぱい……んちゅ、ちゅ、ちゅ……れろれろ……れろれろれろれろお……じゅる、じゅるるるるるるう……んぐちゅ♪」

天音

「はあ、はあ……んちゅ、ちゅ……もつろお……ん
ちゅ、ちゅ……ちゅ……先輩の手の温もり感じさ
せてえ……」

天音

「んちゅ、れろお……れろれろれろれろ……はぶ、
んちゅ♪ ちゅ、れろれろ……んぶつ……じゅる
る……じゅりゅりゅりゅ……ん、ちゅ♪ れろ…
れろれろれろれろ♪ ……♪」

天音

「先輩に揉まれるの、好きれすう……先輩に触られ
る度に、ん、ちゅ……全身がポカポカして、あつ
たかくなつて、安心するんです……」

天音

「これ、好き……先輩におっぱい、乳首」ねぐり回
されるの……好きです……」

天音

「ん、ちゅ……れろ、れろれろれろれろ……ちゅ
ぶ、ん、ちゅ……ちゅ、んちゅ……ちゅ、れろれ
ろ……れろれろれろれろ……」

天音

「はあ、ん、んん……！ あ、そこ、いいです……
乳首の先っぽ……母乳の出口擦られるの……
あっ！ ん、あうう……い、いいです……気持ち
いいですう……」

天音

「ん、ちゅ……れろ、れろれろれろれろ……れりゅ
……じゅふふ、ん、ちゅふ……れろれろれろれ
ろお……じゅるる……じゅふふふ……」

天音

「ん、ちゅ♪ れろれろ……ちゅ、んん……ふちゅ
……じゅるる……れろ、れろれろれろれろ……
ちゅ、んちゅ……ちゅ、れろ、ちゅ……」

天音

「ちゅ♪ ふ、ん、ちゅ……れろ、れろれろれろれろ……
……じゅるる……じゅ♪ ふ、んちゅ……ちゅ、れうう
……れろ、れろれろれろれろれろれろれろれろれろお
……」

天音

「ん、やつ！ あんつ！ ちょ、ちょっと、先輩……
……だ、ダメ……それ以上乳首、んん……擦つ
ちゃ、んあ……や、ダメ……ほんとにダメですっ
て……」

天音

「はあ、はあ……ん、はふ……ん、あ、あうう……
これ、ダメ……濡れちゃう……んん、感じすぎ
て、や……らめ……おパンツ……ハミ、出来ちゃ
いますからあ……」

天音

「あ、あ、あ、ああ……んん、せ、先輩い……」

天音

「はむつ、んちゅ、ちゅ、れろれろ……れろれろれ
ろれろ……じゅる、じゅるるる……ん、んん……
ん、れろれろ……ちゅ、んちゅ、じゅるる……れ
ろれろ」

天音

「はふ……ん、ちゅ、先輩、ダメです……もうおつ
ぱい止めてくらひやいい……ん、あ、ああん……
……」

天音

「ほんとに……ん、んん！ も、もうらめ……
はあ、はあ、んああ、はあ、はあ……ゆ、許して
……おっぱい、これ以上は許してくらひやい……」

天音

「ん、んああ……！ あ、あ、ああ……やあ、
しえ、しえんぱい……ん、ちゅ……れる、れる
れろ……」

天音

「ん、んん！ ダメれす……ん、もう、無理……
で、出ひやうう……！ んふう……！ 先輩に抱
き着いたまま……あ、yan…… お股漏れる
……漏れひやいましゅううう……」

天音

「んあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あああ……
……ら、らめえ……イ、イキゅ……！ イキま
しゅ！ 乳首でいつひやう！ いつひやいま
しゅうう！」

天音

「んん！ んああ！ あ、あ、あ、あああ……！
イ、イグう！ イグイグイグイグイグイグイ
グうう……！」

「いつきゅうううううううううう……！」

天音

「ひゃわあああ！ あ、あ、あ、あああ……！
やつ！ セ、先輩！ 見ないで！ 見ないでくだ
さいい……！」

天音

「ん、はうう……そ、そんな……」の年でお漏らし……しかも……先輩のお膝の上でなんて……ん、あうう……あうあうう……」

天音

「や、せ、先輩！ 聞かないでください！ お漏らしの音聞かないでください……ん、やつ、ちょ、ちょっとやめ、ん、はうう……」

天音

「あああ……あう……あ、あああ……ほんとダメ……ダメですう……んん……！ 恥ずかしい……恥ずかしいですう……」

天音

「は、早く治まつてえ……ああ……お漏らし治まつてえ……ん、あうう……や、やあ……止まんない……お漏らし……おしつ」お……んああ……止まんないよお……」

天音

「ん、ああ……ちょ、ちょっと先輩……嗅がないでください……私のおしつ」嗅がないでください……」

天音

「んん……あうう……はあ、はあ……お願い……お願いだからあ……閉じてえ……おしつ」の穴早く閉じてえ……」

天音

「はあ、はあ……ん、はあ、はあ……はあ……はふうう……」

天音

「ううう……馬鹿……先輩のバカバカバカバカ……！ダメって言ったのに……！おっぱいでお漏らししゃうって言ったのに……！」

天音

「もう、どうしてくれんですか？私、替えの下着なんてもつてないですし、先輩もズボン……私の……そのう……おしつ」「べドベドですし……」

「ふえ？ ザ、全部脱いじゃう……つて、えええええええ……!?」

トラック04

「んっしょ……うう……ん、んん……んむう……
はあ、はあ……うん……しょ……つと……」

「はうう……せ、先輩の前で……スカートと
パンツ……脱いじやいました……」

「……あんもう……頭がクラクラします……なん
でこんな恥ずかしいことができているのか、自分
でも不思議です」

「ううう……その……ど、どうですか？ 私の、裸
……正真正銘、生まれたままの姿……変じやない
ですか？」

「……そ、そうですか。綺麗、ですか……あ、あは
は……良かつた、のかな？ はああ……恥ずかし
くて、体が熱いですよお……」

「あ、えと、その……先輩も……綺麗、ですか？
傷一つなくて……がつちりしてて、逞しくて……
お股のそれも……すつづいカチカチで……」

「こ、これって、あの……あれ、ですよね？ 勃起
……してるんですね……」

「わあ……これが、男の人の……勃起してての姿なん
だ……」

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

「わつ！ わわつ！？ ぴ、ピクピクしてゐ……凄い……触つてもないのに動かせるんですね……不可思議です……」

天音 「つて、あ、あれ？ でも何だか想像してたのとちょっと違う……」

天音 「保健の授業だと、その……亀頭？ つていう部分があるって聞いたことあるんですけど……全部皮に包まれて……」

天音 「あ、もしかして、この長く伸びた皮の中に隠れちゃつてるとか……ですか？」

天音 「な、なるほど……確か包茎っていう……あ、ああ！ 『、『めんなさい先輩！ ちょっと無神経過ぎました！』

天音 「そ、そうですよね……包茎がコンプレックスの人もいるつて聞いたことがありますしつつほ、本当に『ごめんなさい……！』

天音 「つて、あれ？ でも……皮の先からちょっと亀頭が見えて……わ、わわ！ どんどん大きくなつて……」

天音 「も、もしかして……」のままもつともうつと大きくなれば、先輩のおつきなカメさん、出てこれたりしますか？」

天音 「あ、 そなんですね……じゃ、 じゃあ……先輩?
何か私にして欲しい事、 ありますか?」

天音 「先輩の勃起をお手伝いできるなら、 私、 何でもしますから……はい、 大丈夫です……言つてください……先輩の願望……先輩が私としたい事……」

天音 「あ……先輩……か、 顔……近いです、 よ?」

天音 「そんなに、 顔……近付けたら……あ、 当てたい?
唇を、 ですか? ……でも、 それは……
……当たつちやいそうです……」

天音 「はあ、 はあ、 はあ、 はあ……あ、 当てたい?
唇を、 ですか? ……でも、 それは……
あ、 当たつたら……」

天音 「い、 いえ、 嫌つてわけじや、 なくて……先輩のし
たい事なら何でもするつて、 言いましたし……」
「で、 でも……分かつてますか? 私達、 まだ、 そ
の……全然、 そ、 そういう事する関係じやなくつ
て……」

天音 「恋人じや、 ない、 から……あ、 う、 恋人じや
ない、 けど……でも……」

天音 「せん、 ぱい……んんつ……ちゅ……
ん、 ちゅぶ、 ううつ……ふつ……ん、 ちゅ……
ちゅ、 んん……ちゅ……」

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音 「はあ、はあ…………あ…………しちやつ、た……
……先輩と、キス…………」

天音 「私…………キスつて…………その、初めてで……
えつ？ 先輩も、なんですか？ 先輩も…………フ
アーストキス、だつたんですか？」

天音 「そんな、大事な、一生に一度のキス…………わ、私で
良かつたんですか？ ……そ、そうですか…………私
が、いいんだ……」

天音 「せ、先輩…………！ あ、あの…………もう一度、いいで
すか…………？ その、キス…………ちゅ、つて…………先輩
とキス、したいです…………」

天音 「私も嫌じやなかつたですし…………むしろもつとした
いつて思つてますから…………」

天音 「今度はきちんと…………先輩とキス、自分の意志で、
したいです…………」

天音 「あ、先輩…………ん、ちゅ…………ちゅ、ちゅ、
ちゅ…………♪」

天音 「んふ、はつ…………はふつ！ ん、んん！ ちゅ……
んちゅ、れろ…………ちゅ、ちゅ…………んちゅ♪
ちゅ、ちゅ♪」

天音 「んああ…………♪ はあ、はふう…………うう…………キスう
…………先輩との、エツチなキスう…………♪」

天音

「はあ、はあ……ふう、はあ……ああ……心臓、ド
キドキして……んんつ、破裂しそう、です」

天音 「はあつ……はあつ……キス……もう一度、キス、
してください……」

天音 「今度はキスしながら……おっぱい、いっぱい
揉んでほしいです……先輩の唇と手で、私の事
いっぱい気持ちよくして欲しいんです……」

天音 「先輩……ちゅ～ んふつ、う……む“つ”、ん、
ちゅつ……んん、ふ、う、ちゅつ……ん
んうつ……！ ちゅ、ちゅ……ちゅ～」

天音 「ん、はあ、はあ……はふう～……えへへ～ キ
スつて……すつ～く気持ちいい、ですね……」

天音 「きっと先輩とだから……」んなに温かくて……素
敵なキスなんだと思ひます……先輩……もつとし
てください……したいです……して欲しいです……
…♪」

天音 「ん……ちゅ～ ちゅ……ちゅふつ……ちゅ……ん
～～……ちゅ～ ちゅ、ちゅ……ちゅ～」

天音 「ん……あ、やあん……♪ おっぱいも、むう、
ん、いっぱい、んあ……♪ モミモミされて……
気持ち良くて……頭が、飛んじゃいそうですが♪」

天音

「んつ……ちゅぱつ、う……あゅ、はふう、あ……
先輩、舌……ん、れろつ……れろれろつ……
ん、これえ……エツチな、キスう」

天音

「あ、いえ、嫌じやないです……もつと、しましょ
う……んちゅ、れろつ、れろれろおううつ、
ちゅ、ぱつ……ん、あつ……！」

天音

「ちゅぱつ、ちゅぱちゅぱつ、ん、ふあつ、ん……
れろつ、れろれろつ、れろれろれろれろ……ん
ちゅ、ちゅつ、ふ……れろおううつ、ん、ふ
あ、あ、んつ……れろつ、れろれろつ、ちゅ、
じゅるるるるうううつ！」

天音

「ふはあつ……はあ、はあ……あ、『めんなさい』

「あうう……そ、その……今……先輩の、お股のと
ころに、手が当たつちゃつて……はうう……」
れ、すつごく硬いんですね」

「心なしかさつきより大きくなつてる気がします……
…キスで興奮してくれてるんですね……嬉しい…
…♪」

「ならもつと興奮して……先輩の包茎が綺麗に剥け
るまで、お互に乳首をいじりながら……ん、
ちゅつ、キスして……エツチな事しましょう」

天音

「はむ、ちゅつ、ちゅぱ♪ む、んぬう、ちゅ
ぱつ、んふつ……ん、れろつ、れろおおううつ」

天音 「しえんぱい……舌、れへつて出してください……
ほら……れへ……」

天音 「あむう……じゅる、じゅるるるるうへへん
ちゅ♪ じゅる、じゅるる……ちゅふ、れろれろ
れろれろお……じゅるる、んちゅふふふ」

天音 「はむ、ちゅ♪ じゅるる……じゅるるるう……
じゅふ、ん、ちゅ……れへろれろれろ……れ
れろ……ちゅ、ん、ちゅ、ちゅふ、ん、
ちゅ」

天音 「ふはあ……はあ、はあ……先輩……ちゅん
ちゅ……ちゅ……れろ……れろれろれろ……
ちゅ、ん……ちゅ♪」

天音 「はあ、先輩の舌あ……よだれ塗れで……ん、ちゅ
……れろれろ……ちゅ、ちゅ……はふう……んん
……ふふ、エツチな涎の橋がかかつちゃいました
ね……」

天音 「ん……じゅるる……ん、ちゅ……はあ……なんだ
ろう……そんなはずないのに……甘く感じます……
……先輩の唾液……とつても美味しい……」

天音 「もつと……もつとください……先輩のエツチな唾
液……口移しで……私に流し込んでください」

天音 「んむ……ちゅ、れる……じゅる……じゅるるるう
……ん、んちゅう……れろれろ……ちゅ、ちゅ……
……れろれろれろれろお……」

天音 「んふう……ちゅぷ、れる……じゅる……じゅるる
る……んぶう……ちゅ、れる、れろれろ……
ちゅ、ちゅ、ちゅ……♪」

天音 「ん、んん……ぷはあ、はあ、はあ……んあ……喉
……ん、先輩の涎が引っかかって……」

天音 「んふう……♪く……♪く……♪く……♪く……♪
はあ……！ はあ、はあ……はあ……ん、♪く
……」

天音 「美味しいすぎて、全部」つくんしちゃいました……
はふう……何だか先輩が私の中で一つになつた
みたいで……嬉しいです……♪」

天音 「つて、あ……♪ 先輩……いつの間にかそれ……
包茎、剥けてたんですね……良かつた……えへ
へ、おめでとう♪ざいます」

天音 「ふああ……す”い……先っぽって、そんなに赤く
膨れるんですね……生で見たのは初めてだから……
……わあ……凄いです……」

天音 「剥けた皮が境目で段差になつて……つて、あれ?
これ、何か白いのがくつついてて……何だろ
う? ノミかな?」

天音 「先輩、すみません……もつと近くで見せてください……」

天音 「うわあ……皮の間にいっぱい白いのがたまつて……色も濃くって……匂いも……スン、スンスン……すうううう……んつ！？ ゲホつ！ けほつ！ けほつ……！」

天音 「な、何ですかこの匂い……すう！」く酸っぱくて、濃くって……臭い匂い……ん、んん……でも何だか、これ、嗅いでるだけでお股……うう……ムズムズしちゃいます……」

天音 「もう一度お……スン……スンスン……すううう……はああうう……あうう……やつぱりダメです……」の匂い、すう！く臭いのに……でもクセになりますう……♪」

天音 「あ、ああ……これ好きい……」の匂い好きい……大好きれすう……ああ、スン……スンスン……すうううう……はああうう……」

天音 「あううう……や、ダ、ダメ……匂いだけで、んん……！ イ、イク……！ これ、また来ちゃう……あ、ああ……！ またお漏らし来ちゃうう……！」

天音 「んん！ ん、んん！ やつ……だ、ダメ……！ またイクなんて……！」

天音

「う、ううう……！でも」んなエツチな匂い嗅い
じゃ……あうう……イッひやう……！スン、ス
ンスン……すううう……お、おおお♪匂いだ
けでイッひやうう……！」

天音

「んあああ……！あ、あ、あ、ああ……！イ
グつ……！イ、イグイグイグイグ……！ん、
んん……！イ、つぐううう……！」

天音

「ん、んあああああ……！あ、あああ……！
やあ……そんなあ……！ま、またお漏らし…
！……う、ううう！ やあ、いやいやいやいや
……！」

天音

「んはうう……！ダメえ！止まつてえ……！
お漏らしい……！はうう……！あ、あ、あ、
あああ……！」

天音

「はあ、はあ……はひい……！ん、んおおお…
……！お、おおお……！やあ……やらあ……
ん、あうう……！」

天音

「はあ、はあ、はあ、はあ……！ん、んああ……
はあ、はふううう……ん、んみゅうう……
おおお……！お、おおお……！」

天音

「ん、はあ、はあ……はああう……んああ……は
ひゅうう……！やあ……お股またベトベトになっ
てえ……うう、気持ち悪いですう……！」

天音 「それに、子宮の奥……赤ちゃんのお部屋がムズムズしてえ……はあ、はあ、はあ、はあ……」

天音 「あ、先輩も、ここのムズムズするんですか？」

天音 「私の鼻息が当たつて……」そばゆいんですね？」

天音 「なら私と一緒にですね……私も同じ……お股がムズムズして、奥からトプトプエッチなお漏らしちゃつて……」

天音 「ん……じいいい……はあ、はあ……先輩……」れ……こんな臭いまま放置してたら……きつとよくないですよね……」

天音 「包茎の中でいっぱい汚れがたまっちゃつて……」のままだともしかしたら病気になっちゃうかもですしつ……」

天音 「……うん……それなら……ん……ちゅ……」
天音 「ちゅ……ちゅ♪」

天音 「え、えへへ……先輩のここの亀頭の先っぽ……キス……しちゃいました……♪」

天音 「はい……そうです……」のまま私が……お口で……先輩の汚れた包茎を綺麗にしてあげます……♪」

天音

天音
「ん、ちゅ、ちゅ、ちゅ、あ、
ちにも汚れが、んちゅ、ちゅ、わ、ちゅ、
……ちゅ」

天音
「わ……唇に白いのが付いて……ん、あむ……ん、
んん……ごくつ……ごくつ……んん……！
ほつ！ けほつ、けほつ……！」

天音
「う、うえええ……これ……お世辞にも美味しくはないですね……臭い匂いは嫌いじゃなかつたんですけど……味は苦くて……結構ゲテモノ感あります……」

天音「で、でも……きちんとお掃除してあげるついでいいましたか？……責任もって……お口でお掃除してあげます……」

天音
「んむ……ちゅ♪ ちゅ……ちゅ……ちゅ♪
ちゅ……んゅ～……ちゅ♪ ん、ちゅ……ちゅ、
ちゅ……♪」

天音
「んん……」れ……皮に挟まつて」びり付いてて……
……うう……唇だけじゃ取れないですね……ん
なり……今度はお口で咥えて……舌で舐めとるよ
うに……」「

天音

「ん……れへへ……じゅるつ！ んちゅ……じゅ
るる……じゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅん
ちゅ……わゆふつ！ ちゅ……んく……ちゅく
じゅる……じゅるるる……んくくちゅく……ちゅ、
ちゅく」

天音

「あむう……！ じゅるるく……じゅるるる……！
ちゅふつ！ ちゅふふう……！ ん、ん
ふうつ！ うつ！ ん、んふつ！ じゅる……！
じゅるる……！ じゅりゅりゅりゅ……！
じゅぶぶぶぶ「う……！ んふつ！ フふつ！
んちゅ、んく……ふはあつ！ はあ、はあ……
」

天音

「んえ……あうう……！ 先輩い……お口に入れた
途端またおつきくしてえ……う……けほつ！ け
ほ、けほつ……ぱうう……顛外れちやうかと思つ
ちゃいましたよお……」

天音

「ん、でも……またおつきくしてくれたって事は、
私のお口掃除……氣に入つてくれたって事ですよ
ね……？」

天音

「え、えへへ……そうですか……気持ちよくなつて
くれてるんですね……♪ はうう……ああ……な
んだろう……♪ こんなに臭くて美味しくないの
に……先輩が喜んでくれてるって思うと……もつ
ともつとお口♪」奉仕したくて仕方ないです……
♪」

天音

「はあ、はあ……先輩……もつと腰突き出してくだ
さい……喉の奥まで……私のお口全部でしつかり
舐めとつて綺麗にしてあげますから……」

天音
一はい……私の喉奥に汚れを擦りつけるつもりで……
…思いつきり突き入れてください……！」

天音
「ん、んぶう……！　んぶぶう……！　じゅぶう……！
　　んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶう……
　　んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶう……
　　！」

天音

天音

「んん！ れりゅ…………じゅるる…………じゅ
るつ！ んぶつ！ れろ…………れろれろれ
ろ…………じゅるるつ！ ん、んん！ ジゅる
る…………じゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅううう
うう…………ん、んん…………んむう……
！…………ん、ぷはあつ！ はあ、はあ…………」

天音

「ん、うぶつ！ けほつ！ げほげほ…………ん、
はあ…………はあうう…………あうう…………」

天音

「はあ、はあ…………す、すみません…………ちょっと
激しくすぎただけです…………すぐ落ち着きますので気
にしないでください…………」

天音

「はい…………本当に…………大丈夫ですか…………はあ、
はあ…………それよりも…………先輩？ 龜頭の先…………見
せてくれませんか？」

天音

「…………あ…………凄い…………汚れが取れて綺麗なピンク色
で…………えへへ♪ 上手くお掃除できたみたいで良
かつたです♪」

天音

「でも…………あはは…………何だかお掃除する前より硬く
…………おつきくなっちゃつてますね…………」

天音

「ああ……凄い……私の涎と先輩の熱が混じつて……
……とっても蒸れてて……はあ、はあ……先輩……
……うう……せんぱいいく……」

天音

「こ、こんな事いうとはしたない子だつて思われる
かもですけど……私の……先輩のを舐めてたら……
……こ、お股がすっごく熱くなつて……ムズム
ズして……」

天音

「うう……はあ、はあ……だ、ダメれす……うう
……」「んなの我慢できませんよ……」

天音

「先輩……お互い、もう」のままじやおさまりも着
きそうにありませんから……」

「……先輩が、私と同じなら……私と同じ氣持
ちなら……」

天音

「……もつとエッチな事……私と、セックス……
……してみませんか？」

トラック05

「えっと……先輩はベンチに座つてください……私が上になりますので……」

「あ、あはは……なんだかドキドキしちゃいます……まさかこんな事になるなんて……」

「いえ、別に後悔してるとか、そういうのじゃないんです。ただ……まさか今日、「うやつて先輩とすることは思つてなかつたので……」

「でも、勘違いしないでくださいね？ 誰とでもする訳じやないんですから……」

「はい、先輩だから……先輩じゃなきや、こんな事絶対しませんし……先輩以外の人には触らせませんから……」

「だから……どうか、私の初めて……貰つて下さい……私も、先輩の初めて……童貞……貰つちゃいますから……」

「ん、あ、あ……先っぽ触れて……はい……」のま
ま、入れますね？」

「んんんんっ……」「うやつて……私の中に……
先輩の先っぽを入れれば……」

「く、ふつ、や、あん……！ な、なかなか上手
く、ん……入りませんね……」

天音

「ん、んんうつ、ふつ……ふつ、うつ……ああ、体
を、上下に揺すつたら……ち、ちょっととずつ……
入ってきますね」

天音

「こういう入れ方で……いいのかどうか……わかり
ませんけど……んんんつ……！」

天音

「はあ、はあ……先輩は、どうですか？ 痛かった
りは……しないみたいですね……ふふ、だつて、
気持ちよさそうな顔してますもん……♪」

天音

「ならこのまま……んつ、んつ、んつ……ちょっと
ずつ……お腹の中、入れていきます……♪」

天音

「私の子宮から零れたお汁を……ん、しょ……ん、
しょ……ローションがわりにいっぱいまぶして……
…ペタペタ、ペタペタ……♪」

天音

「んんん、うつ……あと、もうちょっとで……ふ、
ああつ……全部入りそうです……」

天音

「あ、ふあつ……！ あ、ああ……き、来ます……
……おつきいの来る……来ちやう……！」

天音

「んああ……！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、
あああ……！ せ、先輩い！ 先輩先輩いい……
！ ん、んんン……！」

天音

「んつ……ひやああああつ……あ、あああ……
お、おおお……♪ おおお……♪ んはあ、
はあ、はあ……はふう……ん、ひやああ……♪」

天音

「はあ、はあ……ああ……♪ ん、あうう……♪
先輩い……♪ は、入りました……♪ いい……
お腹の奥……届いてます……♪ ポコつてお腹膨らん
でますう……♪ はあ、はあ……♪」

天音

「んあ、なんだか、んん、大きさも、ぴったりで……
……はうう……みちみちうつて密着してる感じが、
はつきりわかりますう……」

天音

「はあ、はあ……先輩……私達、一つになつてるん
ですね……お腹の中から先輩の熱……しつかり感
じ取れますし……夢、じゃないんですね……」

天音

「ふああ……♪ 男女で繋がるのって、『こんな感じ
なんだ……』」

天音

「想像より痛くなくつて……ああ……先輩と一つに
なれて、嬉しい気持ちでいっぱいです……」

天音

「はあ、はあ……先輩、このまま……繋がつたまま
ぎゅつしてくれませんか？ はい、ぎゅつて……
……恋人がするみたいに力強く、裸同士でぎゅつて
して欲しいんですけど……」

天音

「ん、んん……あうう……はああ……先輩……あつたかい……お腹の中からも、体の外からも先輩の温もりが感じられて……全身先輩に包まれて……ああ……」れえ♪ 幸せすぎますう……♪

天音

「えへへ、先輩……分かりますか？ 今、先輩の先っぽが届いてるとこ……そこ、きっと私の赤ちゃんのお部屋ですよ？」

天音

「はい、そうです……私の一番大切な場所……将来を誓い合った人の愛が宿る、赤ちゃんのお部屋……先輩だけしか触れない、エツチなお部屋……」

天音

「いいですよ？ 先輩だけが触れる赤ちゃんのお部屋……いっぱい突いて……私の事……可愛がってください……♪」

天音

「ん、あ、あんつ！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああ……♪ ん、はふうう、あつ、ああ……♪ すゞ、い……うあつ……あ、ああつ、下から、んつ、振動、子宮に響いて……」

天音

「三、こんな、んああつ……体の、中に……ん、はあつ、伝わつて、くる、んん…… ものなんだ、あ、あ、あああつ……！」

天音

「す、すゞいい……！ あ、ああ♪ 抱き合いなが
らのセックスう……♪ 肌密着してえ……ん、は
ふう……全身が先輩と一つに溶け合つてゐみたい
……♪」

天音

「んはつ、ああ、すゞい、く、ふあつ、何度も、突
き上がつて、くる、う、ああん……！ はあ、
はあ……あ、ああ……」、こんなのが、初めて…
…！」

天音

「セックス、つて、こんな、んん！ 気持ちいいん
だあ……あ、ああつ……！」

天音

「ふああつ、んひやあ！ あ、あ、あ、あ、あ、
あ、あ、ああ♪ これ、好きい♪ 先輩とのセッ
クス……大好きですう……♪」

天音

「んや、ん、んうつ……はあ、はあ……あうう…
こ、これえ……ダメえ……ヒダヒダかき分けられ
てえ……や、あん！ 奥う！ コンコン来るう…
…赤ちゃんのお部屋コンコン來てるう……！」

天音

「んや、ん、んうつ……はあ、はあ……あうう…
こ、これえ……ダメえ……ヒダヒダかき分けられ
てえ……や、あん！ 奥う！ コンコン来るう…
…赤ちゃんのお部屋コンコン來てるう……！」

天音

「！」これえ……んあ、あああう、「」の、感覚う、子宮突かれる感覚気持ち、良く……ってえ……あ、あ、あうう……！」声、あ、出ちやう……！外なのに……んんー 声出ちゃういますうー！」

「はあ、はあ……！ やつ……んん♪ セ、先輩……！ 私は、ん、ああん♪ だ、大丈夫ですから……もつと……もつと強く……激しくハツチして……ください……」

「だって……先輩……本当はもうと……んん♪
いっぱい動きたいんですね……？ 私といっぱ
いセックスしたいんですね……？」

天音

「ん、あ、あん、はあ、はあ……はいい……分か
りますよお……だつて……私も……もつとお
んん、先輩に愛されたいんですもん……壊れ
ちやうくらじ……赤ちゃん孕んじゃうくらじ求め
られたいんですけど……！」

天音

「ん、んん♪ はあ、あ、あうう……ん、
やへ、あ、ああ……ん、んん、やあん……そんな
私は、エッチじゃないですう……」

天音

「はあ、はあ……でも、もし私がエツチな子になっちゃつたんなら……それはきっと、先輩のせいなんですからあ……♪ ん、んん♪ こんな素敵な先輩に求められたら……あうう……！ 私もエツチになっちゃいますよお……♪」

天音

「先輩が、かつこよくて……素敵のが悪いんですけどからあ……♪ ん、んん♪ こんな素敵な先輩に求められたら……あうう……！ 私もエツチになっちゃいますよお……♪」

天音

「ん、んん……♪ だ、だからあ……♪ ん、やあん♪ はあ、はあ……私をエツチな子にした責任……とつてください……！」

天音

「私の事……いっぴいいっぴい……大好きって……
沢山パンパンして愛してください……！」

天音

「んああ……！ あつ！ んひやああ！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あああ！ や、せ、先輩！
ふあ、う、んあつ……そ、そんな、いきなりそんな、思いつ切り中、突いちや……あ、あんつ！」

天音

「ふあつ、ふ、くあつ、あああんつ、先輩つ……
しゅ“じつ！ あ、ひつ、はひいつ！ スピー
ド、ん、あ、あつ、速いれすう……！」

天音

「ん、あん！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あつ！ ダ、ダメ……！ 声、恥ずかしい、の
にい……！ ん、んん！ そんなパンパン」

「あ、ああつ、す、す」いつ、下からの、突き上げ
ご、あ、ううつ、強、ご、あ、あつ、一、ご、つ

が、か、体の中に、ひ、んんつ、響いて、きます

天音
「ふあ、う、ああっ……あ、あ、ああああっ……
やあ！ し、子宮の近く、ゾリゾリ擦られて……
ん、はひやああっ！ あ、ああ！ 声が、我慢で
きないですよおっ……！」

天音
「先輩のカリが、んああ♪ 良いところお……♪
私の気持ちいいところゾリゾリ引つ搔いてえ
♪ ん、あ、あ、あ、あああ♪」

天音
「んああ！ あ、あ、あ、あうう……！ ん、
ふう、ふう、ふうう……！ ん、んん……声、我
慢できないならあ……」

天音
「はむ！ ちゅ……れろれろ……ちゅ、ん、ちゅ♪
れろふちゅ……ちゅ……れろれろ……ちゅ、
ん、ちゅ……」

天音
「ちゅぱあつ！ はあ、はあ……先輩の口で、私の
口、塞いでください……！」

天音 「ん、ちゅ……れろ、れろれろ……ちゅ、ちゅ、ん
……じゅるる……じゅるじゅるじゅるじゅる……
……んちゅ♪」

天音 「ん、んん！ ピはあつ！ はあ、はあ……ちゅ
……れろ、ん……ちゅ！ ん、ああ！ あ、あ、
あ、ああ……！」

天音 「先輩つ、あ、んああつ、先輩い……す♪」く力
強くて……あ、ああつ、男らしいですう……！」
「こんな……んあつ、あ、あ、あ、ああつ！ ずつ
と……」んなのされたら、んもうつ……我
慢、で、できないつ、ですう……！」

天音 「んふああつ！ あ、ああ！ 深くう、んんつ、
もつと深くう、先輩つ！ あ、あ、あ、ああ
あつ、子宮の奥まで突き込んでえつ……ふあ
ああつ、赤ちゃんのお部屋犯して欲しいで
すうつ……！」

天音 「そしたら、あ、はあ、はあ……もつとお、気持ち
良く、なつてえ……ん、ああん！ あ、くあ、
あ、あうう……ふう……あ、あああつ、もつと、
子宮からエツチ汁溢れてえ……ん、ひやああつ、
気持ちいいと思ひますからあ……」

天音

「んあつ、あ、あうう……！ もつ、と、は、は、
はひい……強く、ん、あんつ、激しく、い、いつ
ぱい、して、ほしい、ふああんつ、あ、あ、あ
あつ……」のまま最後までえ……してください……
！」

天音

「私も、んん！ 先輩が気持ちよくなれるように、
頑張りますからあ！ ん、あ、あ、あ、あ、
あ、あ、ああ……♪ ん、んん……！」

天音

「ほら、」「うやつて、お腹に力を入れて……ん、
ふう……それ！ きゅつきゅ！ きゅつきゅう
う……！」

天音

「はあ、はあ……先輩、どうですか？」「うやつ
て、臍圧できゅつきゅすると、ん、あん！
はあ、はあ……もつと、気持ちいいですよね？」

天音

「え、えへへ……いつか」ういう事するかなって
思つて、お風呂とかで練習してたんですね……ん、
んん！ あ、あ、あ、あああ！」

天音

「はあ、はふう……やあ、これ、きゅつきゅする
とお、私もお……子宫きゅんきゅんしちやつてえ
ん、ああん♪ ダメ……感じすぎちゃう……
！」

天音

「はあ、はあ……」、これえ……ほんとダメです……
……ああつ、私……わ、私いつ、ひ、ん、イクツ……
……いつちゃ、いそうです……！」

天音

「んああ、あ、あ、あ、あああ！　あうう、はあ、
はあ……せ、先輩も……？　く、う、ああつ、先
輩も、イ、イきそうに、あ、ああつ、なつてるん
ですか？」

天音

「はあ、はあ……んん、だつたら、もう……ん、ん
んんううつ、このまま、で、いいですからつ…
…………！」

天音

「はい、このまま、んあ、あ、ああつ、私の中に…
…だ、出しちやつて、ん、ひいい！　はあ、あん
♪　いい、ですから…………きて、ぐださ
いい！」

天音

「私の中に……んあつ、ふあ、ひああつ！　ん
んつ！　子宮の奥……赤ちゃんのお部屋にい！
せ、先輩の……くあつ、先輩の精液……ふあつ、
あ、ああああつ、ピゅつピゅしてください
つ……！」

天音

「ん、ひやあああつ！？　ま、また……？　お、
おおお！　こんな、腰振り、激しくなるなんて…
…………？」

天音

「あん、あ、あ、あ、ああああつ、お、おおお！
こんなに突かれたらつ……はつ、はひい！　ん
おお！　お、おおおお！　私の、もうつ、んん
んつ、イ、イグラツ、イ、イッひやいます
よおおつ……！」

天音

「おお……！　お、お、お、お、お、お、お、
おお！！　お、お、お、お、お、お、お、
おおお！！　ん、んひいい！！」

天音

「イ、イギゅうう！　ひやうう！　は、はひい！
やつ、らめえ……！　げ、限界つ……です！　本
当に限界れすうう……！」

天音

「しょんぱいい……！　んああ……！　あ、あ、
あ、あああ……！　い、一緒にいこううつ、
先輩と、一緒に、ひ、んんんつ、イきたい、で
すつ、あ、ああつ、先輩つ、一緒にイきましょ
う！」

天音

「んひやあつ！！　あ、ああつ、イぐうつ、先輩
と、イクツ、んんんつ、一緒に、イつちやう、
う、うつ、イつちやう、イつちやう、イつちや
うううううつ……！」

天音

「あああ……！　おおお……！　お、お、お、
お、お、お、お、おお！　お、お、お、お、
お、お、おおお！」

天音

「ああ……！　先輩いい……！　先輩先輩先輩先
輩いい……！」

天音

「ううつ、んんつ、ひやあ！　あ、あ、あつ、ああ
ああつ、ああああああつ、ああああああああ
あつ、せんツツぱいいいいいい——

天音

11

「あ、あああああああ……お、おおおおお……お、
おひふ、くああ、ううう……あ、いああ、ん
ひ、あああああ」

天音
「はあつ！ は、あつ……はあつ……はあつ……
……はあつ……はあつ……はあああああつ
……」

「はあ、はひゅうう……せ、先輩の精液……ひゅつ
ひゅ来てるの……分かりましゅ……はあ、はあ……
はあ、はあ……♪」

「え、えへへ……やつたあ……♪ 私 初めての
セックスで先輩の事……イかせられたんですね
……はあ、はあ……う、嬉しい、です……♪」

天音
「はあ、はあ……はい……私も……盛大にいつちゃいました……」

「うう、あ、ああ……ダ、ダメ……気持ちよすぎで
ゆるんじゃって……あ、ああ……また出ます……
先輩い……またあ……お股からおしつ「お……漏
れまうう……漏れちゃいますうう……」

天音 「ん、んん……！ あ、あ、あ、ああ……で、で
るう……おしつ」出ちやううう……！」

天音 「ん、ひうううううううううう……！ あ、あああ……！ や、やだあ……！ 今日だけでお漏らし何
回もお……ん、んん……！」

天音 「は、はひゅうう……せ、先輩い……先輩先輩先輩
先輩いい……はあ、はあ……んああ……先輩にか
かつてるう……」

天音 「ああ……精液塗れの先っぽお……私のおしつ」で
洗い流してますう……ん、やあ……あうう……恥
ずかしいですう……」

天音 「はあ、はあ……はあ……はふうう……ああ、やつ
とお漏らし……止まりましたあ……」

天音 「はあつ……はあつ……はああつ……まだ、
お股ヒクヒクして……心臓……バクバクいつま
す……」

天音 「す、すごいですよね……初めてなのに、2人一緒
に……イける、なんて……」

天音 「なんだろう……」の気持ち……お漏らしいつ
ぱい見られて、匂いまで嗅がれたのに……でも胸
がいっぱいです……すく……幸せです……♪」

天音

「私と先輩つて……なんて言うか……」「う……心と体の相性がいいのかもしませんね」

天音

「どつても……何だか……うん、嬉しくて……最高な気分です……」

「先輩……もう少し……雨が止むまで……」のまま
一つになつたまま……抱き合つていいですか?
……はい、このまま一緒に……雨が止むまで一
緒に……ずっと……一緒に……」

天音

トラック06

「はあぅうつ、雨、上がりましたね、さつきまでの天気が嘘みたい」

「すごい土砂降りだったからいつやむんだろうって思つてましたけど、ちょうど良かつたですね」

「あ、見てください。西の空があんなに赤くなってる……」

「元々下校するのが遅かつたんですけど、思ったよりも時間が経っちゃつてましたね」

「はい……夕焼け、すごく綺麗です……けど、東のほうはだいぶ暗くなつてますから、急いで帰らないと……」

「えっ？ 体ですか？ はい、大丈夫です！ 全然寒くありませんよ♪」

「どっちかって言つと……さつきまで……アツアツでしたので……」

「あ、あはは……私、何言つてるんだる……は、早く帰りましょう！」

「…………先輩、今日は…………ありがとうございました」

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音

天音 「なんのお礼つて…………そのう……色々、です
よ」

天音 「ほら……し、刺激的な体験が…………できました
から」

天音 「あ、でも、今日の事は、誰にも言わないでくださいね。お友達に自慢したりしたら……ダメですか
らねつ！」

天音 「はい…………約束です」

天音 「ふえ？ 指切り？ それは…………ふふつ、先輩つた
ら子供みたい…………でも、いいですよ。しま
しょうか、指切り」

天音 「ではいきますよ♪ ゆうびきゅりげんま
ん、ううそつういたらはうりせうんぼうんのう
うます…………ゆうびきつた！」

天音 「えへへ…………約束破つたら、本当に針千本ですから
ね？ 肝に銘じておいてください♪」

天音 「つて、あ…………そうだ。約束ついでに、お願
いがあるんですけど…………明日も…………部活の練
習、付き合つてもらつていいですか？」

天音 「わ！ いんですか？ やつた！ ありがとうございます！」

天音

「また……今日みたいに遅くなつちやうかもしけ
せんけど……よろしくお願ひします」

天音

「ふえ？ い、嫌つ！ ベ、別にまた今日みたいな
事を期待してるとか、そういう訳ではなくてです
ね！」

天音

「ただもしも……本当に偶然！ たまたまつ！
……途中でまた雨に降られたりしたら……その
時は……ほら……濡れて帰るわけにもいかな
いですから……し、仕方ないかな……って思った
り思わなかつたり……」

天音

「そ、そうです！ 仕方ないことなんですが……だか
ら……」の辺で急な雨に降られたときは……」

天音

「また……あのバス停で雨宿り、しましようね……
先輩……♪」